

〈純粹音楽〉の作曲論としてのパウル・ベッカーの音楽現象学

小島広之(東京大学)

戦間期に活躍した音楽批評家パウル・ベッカーは、1924年に開催された「第二回美学ならびに一般芸術学会議」において「音楽現象学とは何か」と題する講演を行った。本発表は、これまで十分に論じられてこなかったベッカーの音楽現象学に焦点を当て、それが、同時代の創作実践における〈純粹音楽〉の理念を理論的に支える作曲論として機能していたことを明らかにするものである。

音楽における表現の豊かさは、18世紀後半のシュトゥルム・ウント・ドラングの時代から20世紀初頭の表現主義の時代に至るまで、その芸術的価値の根幹とみなされてきた。しかし第一次世界大戦後、多くの先進的な音楽家は、前時代の音楽を「表現に汚染された音楽」とみなし、〈純粹音楽〉の探求へと転じた。作曲家たちは、18世紀以前の音楽的要素やジャズをはじめとする同時代の大衆音楽のコラージュ的引用などを通して、表現を脱色した〈純粹音楽〉の作曲を試みた。しかしながら、この時代の創作から、作品上で提示された(とされる)純粹性が、実際にどのような意味や性質を持つものであるのかを把握することは困難である。この状況を踏まえると、同時代の作曲家と密な関わりを持ったベッカーの評論活動は注目に値する。音楽現象学において彼は、「事象そのもの」を論及したフッサールに呼応するように、「音楽そのもの」について考察することで、〈純粹音楽〉の在り方に理論的な基盤を与えた。これは、音楽分析から論じることが困難であった第一次世界大戦前後の音楽における〈純粹性〉や反表現という理念について知るための重要なドキュメントである。

この時代にはベッカーを含む複数の音楽批評家が「音楽現象学」の名のもとに理論を展開したが、それはAndreas Eichhornの*Paul Bekker: Facetten eines kritischen Geistes* (2002)のような浩瀚かつ充実したベッカー研究においてさえ、言及されることはあっても、中心的な研究対象にはならなかった。その背景として、第二次世界大戦後の音楽がゼロからのリスタートを標榜し、戦前の思想的成果を断絶させたことにより、彼らの業績が閑却されてきたことが挙げられる。しかし近年、Benjamin Steegeの*An Unnatural Attitude: Phenomenology in Weimar Musical Thought* (2021)によって、戦間期の音楽現象学は、ポスト・ヘルムホルツの聴取論として音楽思想史に定位された。

この動向を踏まえて本研究は、ベッカーの音楽現象学を作曲論として分析する。音楽現象学においてベッカーは、「音楽を意志の無媒介的告知とみなす」「形而上学的思弁」を退け、聴取論と作曲論を往還する観点から、音楽の「素材的実体」およびその「本質形式」を純粹に感取することで、音楽外的なものの参照を排した作曲が可能になると主張した。本研究は、この指摘を通して、戦間期における〈純粹音楽〉の思想的基盤を再評価し、ベッカーの音楽現象学を作曲理論として捉え直す視座を提示するものである。